

整形の盛行と比べても、現実には肉体改造にきわめて消極的な日本は、仮想現実 virtual realityの世界では、全く別の相貌を見せる。

実際、日本産のアニメは、身体毀損を、躊躇せず極限まで追求してきた。押井守の *Ghost in the Shell* (1995) はむしろ海外の識者に深い衝撃を与えた。土郎正宗の助けを借りて、押井は全人類の累積的知識が亡霊 ghost よろしく電子情報として頭蓋 shell に格納され、義眼、義手など様々な代替的電子装置を装着した身体を構想した。ここではもはや生体と機械、自他の思考は分別できず、個別生命体の輪郭を確定することも不可能となる。西洋起源だったはずの技術連関が、身体操作において西洋文明の根幹である個人の尊厳を揺さぶっている。押井はその危機的状況を、仮想現実を切り所に容赦なく暴いてみせた。「文明と身体」の将来を問う鍵が、ここには萌芽的に顔を出している。

＊国際日本文化研究センターにおける共同研究会「文明と身体」(牛村圭教授・主催)における、古田島洋介氏の発表「纏足の再把握——身体論としての視点を求めて」(2010年7月31日)に対する筆者の即興の論評を活字化した。主催者の牛村圭、発表者の古田島洋介両氏に謝意を表する。

(丁)

連載121

身体毀損の文明学にむけて・下

纏足・FGS女性器切除手術から甲殻に宿る幽霊まで

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授

稲賀繁美

(承前) 身体改造即「家畜化」といえば否定的な印象を伴うが、そこに「自己実現」といった価値を付与しさえすれば、実現のために心身の苦痛にも耐える忍耐能力こそが、精神性の高さの指標となる。美のためには痛いのも我慢するという美容整形を、おしなべて精神的隷属の証拠、あるいは家父長制の犠牲に還元する説明は、政治的偏向たるを免れまい。それは、ひいては文化一般を抑圧の名の下に否定する極論へと結び付けることとなるからだ。一方、無痛文明への疑念は、森岡正博も提起するとおりだ。そして Marina Abramović の場合を引き合いに出すまでもなく、自己の身体への毀損行為は、特権的な藝術家にとっては、自己破壊と踵を接した、自己表現の究極の拠り所となる。

それが儒教道徳の影響か否かはとにかく、近代以来の日本では、臣民の肉体に傷跡を残す介入には消極的だった(当事者の生命を奪う殉死やカミカゼ特攻、ベンガルのサティ等)、身体毀損の問題とは別途に、あらためて死生観の問題として論じたい。たしかにBCG注射の技術変更は、ある特定の世代の日本人の上腕に醜悪な傷を残したが、これは当時の厚生省の施策を記念する例外的な身体的損傷の痕跡といってよい。だがお隣・韓国の美容

ノンフィクション

見ることは容易だろう。それは女性の人格への蹂躪であり人権抑圧と見られても不思議ではない。母が娘に強いるにせよ、その外側に家父長制の掟を読むことも困難ではない。加えて纏足は、人工的に製造され、私秘に隠匿された、性器の代替愛玩物でもあった。

だが辜鴻銘の弁明を待つまでもなく、ピアスやコルセットは容認しながら、非西洋社会の風習ばかりを蛮行呼ばわりする価値観の裏には、生理的嫌悪感と道徳的正義感を背後で支えていた政治的無意識が露呈する。そこには非西洋世界内の支配構造を非難することによって、西洋世界価値観による世界支配を肯定するという二重構造が潜んでいたからだ。入れ墨や彫り物は、現在ではむしろ西洋人に愛好者が多い。ここは Peter Sloterdijk に従って、これらの身体改造術一般に、人類による人類自らの「家畜化」志向をみるべきだろう。

だが家畜化となると、日本列島文化史の特殊性に注目する言説が登場する。曰く、宦官も纏足も島国・日本には定着しなかったが、これは牧畜文化の去勢技術が列島に伝播しなかったことと同根だ、というわけだ。騎馬民族説が物質文化史の立場からは支持を受けない理由の一斑もここに帰着する。むしろこれは口蹄疫の蔓延を招いて、宮崎の畜産家が大被害を齎らした、今日の産業化した牧畜業導入以前の昔話である。

(以下次号)

連載120

身体毀損の文明学にむけて・上

纏足・FGS女性器切除手術から甲殻に宿る幽霊まで

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授

稲賀繁美

フランスの南部にあるベネディクト会の修道院に、臨濟宗の禅僧を引き連れて合宿したことがある。日本のお坊さんたちに何が耐え難かったかと言って、食事毎に出されるチーズの匂いに勝るものはなかった。こんな足の裏のように臭いものには耐えられない、と。驚いたことに、これと正反対の理屈で、清朝遺臣の儒者、辜鴻銘(1854-1928)は、西洋人に対して纏足を擁護していた。纏足の悪臭を言い募る批判者に対して辜は、それならあのチーズの悪臭はなんだ、と切り返したのだという。どちらも優れた「臭覚の藝術」である。これが儒者の理屈だった。この古田島洋介氏の指摘には蒙を啓かれた。

元代に漢民族で流行を見て、明代から清朝末期まで隆盛を誇った社会風習に、富裕な女子の纏足がある。

『金瓶梅』を見ても、冒頭第4回での西門慶と潘金蓮の逢う瀬からして、纏足に被せる靴の意匠が、男女の恋の駆け引きに、なくては叶わぬ道具立てだったことが窺われる。幼女に対するその施術がきわめて過酷なものだったことには証言もある(Howard S. Levy, *Chinese Foodbinding*, 1967)。だが、富裕な階級にとっては、纏足は娘の嫁入りにも不可欠の条件であり、良家の母親が娘に強いた風習だった。

現在の価値観からみれば、ここにFGS(通称「女子割礼」の「政治的に正しい表現」)にも匹敵する、女性の身体への毀損行為を

ノンフィクション